

Yamakado News Letter



メリケンカルカヤ除去作業 9月25日 Photo by 藤本H

難しい外来種のと関わり

例年、夏の終わりと共に始まるのが、湿原で生育範囲を広げつつある、メリケンカルカヤの駆除作業です。2011年に廃業した南側隣地の牧場の跡地では遷移が進み、その過程でメリケンカルカヤが大繁殖しています。現在は大量の種が南風に乗って、湿原にも降り注いでいます。

メリケンカルカヤは外来生物法によって要注意外来生物に指定されている植物です。ところで、外来生物とは何でしょうか。外来生物法では「海外から我が国に導入されることによりその本来の生息地又は生育地の外に存することとなる生物」と定義されています。また、外来種という言葉もあります。環境省による用語解説では「導入により、その自然分布域の外に生育又は生息する生物種」と説明されています。ここでの導入の意味は「意図的・非意図的を問わず人為的に、過去あるいは現在の自然分布域外へ移動させること。導入の時期は問わない」とあります。外来種は外来生物を含む、より広い概念です。国内間でも人為的に移されて定着した生物は外来種となります。いずれも人の関与が問題とされています。

では、外来種の何が問題なのでしょう。それは外来種が生物多様性の危機を招くからだと言われています。生物多様性がなぜ大切かはここで詳しくは書きませんが、山門水源の森では、メリケンカルカヤが繁茂することで、同じような環境を好むこの森の在来植物が追いやられていくことが懸念されています。「生物

多様性国家戦略2012-2020」の中では日本の生物多様性を脅かす「4つの危機」が示されています。その内の一つが外来種です。

4つの危機は、

- **第1の危機**（開発など人間活動による危機）、
- **第2の危機**（自然に対する働きかけの縮小による危機）、
- **第3の危機**（人間により持ち込まれたものによる危機）、
- **第4の危機**（地球環境の変化による危機）です。

第1の危機と第2の危機では、人の関わりの問題点が相反しています。過剰でも過小でも問題であるとは、悩ましいことです。常にバランスを考えよということでしょうか。

山門水源の森のメリケンカルカヤの定着は、牧場経営が停止してしまった後の、隣地の植生変化（遷移が進行していること）が大きな要因と考えられますが、生物多様性の危機の観点では、第2と第3の複合的な危機と言えます。その問題解決の方法として、種子供給の元を絶つというのは、敷地外の大変広い区域が範囲となるので困難です。山門水源の森の保全活動として今やれることは、見つけ次第コツコツと除去していくことくらいです。こうした活動が危機回避につながっているのか？そう思う人も少なくないと思います。しかし今のところ、簡単で効果的な解決方法はなさそうです。

今後もしばらくは、メリケンカルカヤとの付き合いが続きそうです。これを縁に生物多様性保全について皆さんと共に考え、活動が続けられればと考えています。



隣の牧場跡ではメリケンカルカヤが大繁殖 8月10日

今月の森の様子

秋は冬を越せない生き物が世代交代に勤しむ時期でもあります。森の中でも様々な生き物が冬に備えて、一所懸命活動しています。

クロアゲハの幼虫はミカン科の植物しか食べられません。山門水源の森でよく見られるミカン科の植物にカラスザンショウがありますが、これに産卵するクロアゲハを時々見かけます。

沢道の休場大杉のすぐ傍に高さ30cm程度の、小さなカラスザンショウがあります。9月1日、このカラスザンショウに3匹の幼虫を見つけました。クロアゲハの幼虫のようです。既に葉っぱは3割ほど食べられており、蛹になるまでの食料としては、この木

1本では足りないように思いました。案の定、9月5日には全ての葉が食い尽くされ、呆然と佇む幼虫の姿が見られました。翌日は幼虫の姿は見られなくなりましたが、どこかに移動して蛹になったのか、別のカラスザンショウを見つけて移動したのかは不明です。昆虫図鑑などによれば、この時期の幼虫は蛹になった後、その姿のまま冬を越して、来春に蝶になるそうです。

さて親の方ですが、9月初旬頃では美しい翅をヒラヒラさせて森の中を飛んでいる姿が見られますが、それも下旬になると、大方の蝶の翅はボロボロになっています。一見みずばらしい姿ですが、交尾や産卵が終わり、次の世代への引き継ぎができたのでしょうか、清々しい気持ちで残り少ない時間を過ごしているようにも思えます。

自然界では弱い立場の生き物は強い生き物の糧となっていくます。山門水源の森の中で緑り広げられている生き物の生存競争も、弱肉強食で残酷です。しかし、これら生き物は、ただ命のリレーをする中の一つの命として、一所懸命生きようとしているだけなのでしょう。ボロボロの翅の蝶が清々しく見ると書きましたが、そうした純粋に「死ぬまで生きる」姿を見ることが、見た人の生命力の活性化にも繋がっているのではないかと思えるのです。特に自然について学ぶとか研究するとかせずとも、生命が溢れた自然はそのままの姿が偉大であり、人に大きな影響力を与えていると思います。



クロアゲハの産卵 画像は昨年のもので



旺盛な食欲で葉を食べる幼虫 9/1



葉を食い尽くした幼虫 9/5



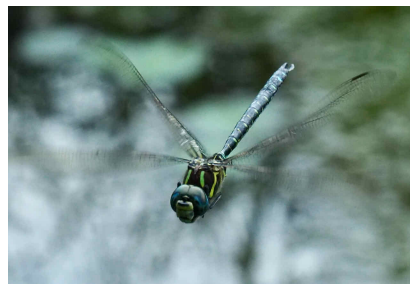
カラスザンショウが再び葉を出す 9/20



ボロボロの翅で吸蜜する親世代 9/20



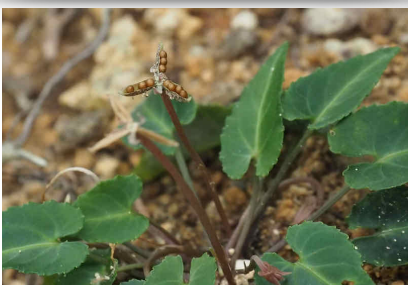
珍しいハイカグラテングタケの群生 9/1



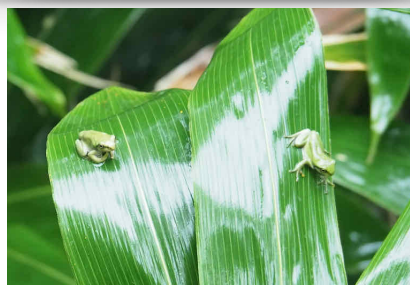
付属湿地を巡回する オオルリボシヤンマ♂ 9/5



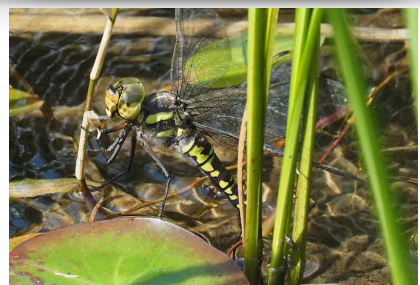
産卵に向かうオオシオカラトンボ♀と上空を巡回する♂ 9/5



シハイスミレ蒴果 9/12



上陸が続くモリアオガエル幼体 9/14



オオルリボシヤンマの産卵 9/24